

フランスの小学校における読書教育・読書支援
—— 教育プログラムと教育資料の分析 ——

安 積 みづ の

松 山 大 学
言語文化研究 第36巻第1号 (抜刷)
2016年9月

Matsuyama University
Studies in Language and Literature
Vol. 36 No. 1 September 2016

フランスの小学校における読書教育・読書支援

—— 教育プログラムと教育資料の分析 ——

安 積 み づ の

イントロダクション

フランスの児童文学の翻訳をするうちに、拙訳『おこる』¹⁾ 原作の版元ガリマル社の web 上の教育資料に興味を持ち、さらに同様の他のすぐれた読書支援の資料を読み漁るようになった。フランスで子どもの読書教育・読書支援のために公開されている教育資料には目を見張るものがあり、活発な読書活動が窺われる。そこで自由に閲覧できる、児童文学作品の分析や批評は質が高いものであり、数の上でもかなりの充実ぶりで、ヴィジュアル・アートや哲学の授業向けの資料など、様々なアプローチが存在する。日本において学校の読み聞かせボランティアをしたり、フランスの児童文学を紹介したりする立場から見ると、フランスの読書教育・読書支援は、たいへん興味深いものである。

フランスの読書教育については、すでに辻由美が、パリ読書センターの「読書アクション」、子どもたちの選ぶ文学賞(高校生ゴンクール賞・クロノス賞・アンコリュプティブル賞)、司書教諭の指導する「プレス週間」などの活動について現場のレポートを行っている²⁾。特に高校生ゴンクール賞については、国民教育高等教育研究省³⁾とフナック書店とのパートナーシップで成り立っている官民一体の読書教育を紹介している。

また根本彰と足立幸子は、フランスの読書教育について調査し、国民教育省が規定する日本の学習指導要領に当たる教育プログラム (programme) における読書、教育支援を行うドキュメンタリスト教員と学校図書館、その他のメ

ディア環境（教育ドキュメンテーション資源センターや公立図書館）について報告している⁴⁾。この報告の中で足立は、中学や高校の卒業試験や国民教育省の通達などを調べ、「フランス語の教育がどのような出口を想定しているかに着目することで、フランスのカリキュラムに読書がどのように扱われているか」論じている⁵⁾。

本研究においては足立と同様、教育プログラム中の「フランス語」を取り扱うが、特にその中で、「口頭言語」や「読むこと」などと並べられている「文学」の領域を中心にし、これまで注目されてこなかった前述の豊富な教育資料を分析することで、実際に子どもが読書する本やその読み方により近づいて、その教育や支援について調べる。

そもそも市販の絵本や児童書に対して、これだけ多くの教育資料が web で公開されていることは驚くばかりであるが、これは、フランスでの国語つまりフランス語の授業で使われる教材の自由度にも依るようである。根本によれば、フランスでは国民教育省が全国的な教育課程の基準として、日本の学習指導要領に当たる、教育プログラム (programme) を定めているが、教科書検定制度のようなものはない。生徒に貸与される教科書は、学校の教員集団によって行われ、内容は資料集に近いものである。そこで、学校での学習がプログラムに沿っていても内容的にはかなり自由であるという⁶⁾。したがって、まず絵本や児童書はある程度の数は授業で読まれ、教材としての需要がある。次に、このように比較的自由に採択される絵本や児童書には、より使いやすくするために教育資料が提供されている。大手出版社は、自社の書籍に教育資料を作り、web サイト上で公開している。一方で公的機関が、それよりさらに数多く内容の濃い教育資料を作成していることは注目に値する。例えば、本論で教育資料を取り上げるオルレアン＝トゥール大学区ではウール＝エ＝ロワール県のグループが読書のための教育資料を作り、web サイト *Écolire* で公開している⁷⁾。スタッフは、常任の作業グループとして、国民教育省視察官である県のグループ責任者1名と、シャルトル、シャトーダンなど県の主要都市の教育指導主事

10名が入っている。企画によっては、オルレアン大学付設教師教育大学院の教員2名、再教育指導者に当たる小学校教諭数名、シャルトル市立図書館とウール＝エ＝ロアル県立図書館から児童書担当図書館員が1名ずつ、オルレアン＝トゥール大学区のCANOPÉ⁸⁾から1名が加わっている。つまり地域密着の体制で教員が利用しやすい教育資料が作成され、提供されているようである。また各大学区の作成するこのような質の高い教育資料は、教育ドキュメンテーションセンターのネットワークCANOPÉや、テーマ別にセレクトされているwebサイトÉducasources⁹⁾などを通じて、全国で活用できるようになっており、教育資料のかなりの部分を占めている。

さて、絵本や児童書の読み方については、教材となる本が、国語であるフランス語自体の習得や読解の授業で使用され、一つの作品として分析や批評の対象となっていることは容易に推測がつく。しかし時には、授業で使っている作品と比べ読みをするために別の作品が読まれることもあるであろうし、授業の延長として読み広げのために個人的読書の対象となることも考えられる。実際の授業を確かめ、読解などを行うフランス語の授業と、個人的読書の比重を知ることは、本論文の守備範囲を超えるものである。そこでここでは、フランスでの読書教育について、「フランス語」の教育プログラムの一領域「文学」と、その関連の通達に、どのような目標が掲げられているか調べ、教育プログラムの目標に達するために、どのような方法が用いられているのかを探る。さらに国民教育省の選書リストにどのような作品が選書されているのか、またこれらの図書のためにどのような教育資料が作られ公開されているのかを手掛かりに、フランスにおける読書教育・読書支援の具体的方策を概括的に捉えることを目的とする。

実際に分析するのは、国民教育省のwebサイトに掲載された、「フランス語」の教育プログラムの一領域である「文学」の項目と、その内容をより具体的にした「初級2年と中級のための段階的学習／フランス語／文学」という2008年6月の通達¹⁰⁾である。この「段階的学習」の通達は、教育プログラム

を実施するためのサポートとして作られたもので、教育プログラムに完璧に適合しているということである¹¹⁾ 同時に、国民教育省の選書リスト¹²⁾ に挙げられている絵本や児童書とそれに対するコメント、地域ごとに教育を監督する行政組織である大学区 (académie) の web サイトに掲載された教育資料や、出版社が公開している web 上の教育資料を分析していく。例に挙げるものは、日本での読書教育・読書支援の現場で利用できるよう、可能な限り邦訳のある絵本や昔話を選んでいく。

本題に入る前に、フランスの学校制度を確認しておこう。フランスは、小学校 (école primaire) 5年、中学校 (collège) 4年、高等学校 (lycée) 3年の5・4・3制である。小学校での初等教育は、5、6歳から10、11歳までの5年間である。学年は、日本の小学校1年生に相当するのが準備級 (CP: cours préparatoire), 続いて初級1年 (CE1: cours élémentaire 1^{ère} année), 初級2年 (CE2: cours élémentaire 2^e année), 中級1年 (CM1: cours moyen 1^{ère} année), 最終級は日本の小学校5年生に当たる中級2年 (CM2: cours moyen 2^e année) となる。また、教育プログラムには、1年単位ではないより大きな時間単位であるサイクル (Cycle), 和訳では「期」が用いられている。幼稚園の年少組と年長組が「初期学習期」(Cycle des apprentissages premiers), 続いて、小学校準備級と初級1年 (日本の小学1年, 2年) が「基礎学習期」(Cycle des apprentissages fondamentaux), 小学校初級2年と中級1年と中級2年 (日本の小学3年, 4年, 5年) が「深化学習期」(Cycle des approfondissements) である。本論文では、上記の名称を使いながら、必要に応じて日本の小学校の学年を参照する。

1. 教育プログラムと通達「段階的学習」中の「文学」

それでは、教育プログラムの「フランス語／文学」と「初級2年と中級のた

めの段階的学習／フランス語／読むことと書くこと／文学」を取り扱い、読書教育についてどのような目標が掲げられているかを詳細に調べる。

1. -1. 教育プログラム中の「文学」

まずは、教育プログラムであるが、基礎学習期では教科フランス語は、以下の領域に分けられている。基礎学習期（CP 小学校準備級と CE1 初級1年）では、教科「フランス語」には、「口頭言語」・「読むこと」・「書くこと」・「語彙」・「文法」・「綴り」の領域がある。深化学習期（CE2 小学校初級2年と CM1 中級1年と CM2 中級2年）では、教科フランス語は三つに分けられ、「1 口頭言語」・「2 読むこと、書くこと」・「3 フランス語の勉強・語彙」となっており、さらに「2 読むこと、書くこと」が「読むこと」・「文学」・「作文」、「3 フランス語の勉強」が「語彙」・「文法」・「綴り」に分けられて合計七つの領域となっている。つまり日本の小学3年から5年に当たる深化学習期で、プログラムに初めて「文学」という領域が登場している。勉強するテキストがより難しくなり、より高度な読解能力が必要とされる頃になると、「読むこと」と「文学」が分けられているようである。基礎学習期については、「文学」の領域が存在しないので、他の領域の内容を見る必要がある。

以下が教育プログラムの「文学」の全訳である。

文学

文学の教育プログラムは、一人一人の生徒の年齢にふさわしい、過去と現在の児童文学や文化遺産の源泉から汲み取られた作品のリストを与えることを目標とする。生徒はこのようにして、共通の文学文化の形成に参加する。毎年、生徒たちは様々なジャンルにわたり、国民教育省が定期的に発行する児童文学の図書目録や少年少女の古典的名作に属する作品を通読する。これらの通読は、生徒の読書する喜びが大きくなるよう気遣って指

導されるものとする。

生徒たちは、読んだ本を紹介し、自分の感想や見方を表現し、これらの主題について意見を交わし、テキスト間の関連付けを行う（作者、テーマ、表現されている感情、登場人物、出来事、空間や時間の状況、喜劇的または悲劇的な感じ）。様々な解釈は常に、その解釈が可能となるかまたは反対に不可能であるか、テキストの諸要素に結び付けられるものとする¹³⁾。

1.-2. 通達「段階的学習」中の「文学」

次に、通達「段階的学習」であるが、教科フランス語は、以下の領域に分けられている。基礎学習期では教育プログラムと同様、教科「フランス語」には、「口頭言語」・「読むこと」・「書くこと」・「語彙」・「文法」・「綴り字」の領域がある。しかし深化学習期では、教科フランス語の中の知識技能の構成要素は五つ「口頭言語」・「読むことと書くこと」・「語彙」・「文法」・「綴り」に分けられ、さらに「読むことと書くこと」が「読むこと」・「文学」・「書くこと」・「作文」に分けられて合計八つの領域となっている。日本の小学校3年から5年に当たる深化学習期に初出する「フランス語／読むことと書くこと／文学」は、「段階的学習」では、以下のように具体的に示されている。

文学

初級2年（CE2）

- ・一つの作品を通読する、または長編作品から大分量の抜粋を読む。
- ・読んだ作品を紹介する、それらについて自分の意見を述べる。
- ・数年前または数カ月前に読んだ物語を、暗記して語る。またはイラストを見ながら語る：題名を知っている。
- ・テキスト同士、または作品同士を関連付ける：同じ作家、同じテーマ、同じ登場人物など。

中級1年 (CM1)

- ・少なくとも1学期に作品1冊を読み、紹介する；作品に特徴的な抜粋を選び、音読する。
- ・難しい部分で、読者としてふさわしい行動をする：覚えておくためにメモを取る、再読、助けてもらうなど。
- ・読んだ作品の題名と作者を思い出す。
- ・ある作品についてのディスカッションに参加し、論拠を示しながら、自分の解釈を他のものに対立させる。

中級2年 (CM2)

- ・1学年で少なくとも5冊は読み、紹介する；作品に特徴的な抜粋を選び、音読する。
- ・選んだ本や、自分の好みについて明確に述べる。
- ・読んだ1作品について暗記して語る；特徴的な1節をそらで引用する。
- ・文学作品同士を、口頭または筆記で比較する¹⁴⁾

ここでの「文学」の目標の大きな特徴をまとめると、まず実際に本を読むこと、そして読んだ作品を紹介すること、作品についての自分の見方を、ディスカッションなどで論拠を示して発表すること、さらに別の作品と比べて読み、口頭または筆記で表現することである。

それでは次に、この「文学」の領域を到達目標として、その目標に至るべくフランス語の各領域においてどのような連携や発展があるかを調べていく。特に基礎学習期については、「文学」の領域が存在しないので、他の領域の内容を見る必要がある。

以下に、フランス語の他の領域との関係を軸に、1. 「文学」と「読むこと」、2. 「文学」と「口頭言語」・「書くこと」、3. 比べて読むことの3点から、教育資料を援用して論証していく。

2. 「文学」と「読むこと」

2.-1. 図書館利用教育

図書館利用教育については、「文学」の項目の中には図書館という文言はないが、通達の中で、基礎学習期から文章を読むことを教わる中で、物としての本を知ることが目標とされ、深化学習期には、読書や読書活動の場としての図書館利用教育が明言されている。

基礎学習期の小学校の最初の学年（CP 準備学年）では、文の成分やパラテキストなど本にまつわる語彙を教える。「文章を読むことについての特殊な語彙を知り使う。本・表紙・ページ・行。作者・題名。文章・文・単語。冒頭・終わり・登場人物・物語。」¹⁵⁾ この目標に即して、ガリマール社では、自社で刊行している人気のクエンティン・ブレイク絵のロアルド・ダール・コレクションなど¹⁶⁾ の教育資料で、作者やイラストレーターやコレクションや出版社がどこに書かれているか問う設問を準備している¹⁷⁾ これは、『三匹のコブタ』の教育資料も同様で、基礎学習期である小学校準備級と初級1年（日本の小学1年，2年）では、文章を読むことに関する特殊な語彙を知るために、本の題名や作者やコレクションを問うプリントが準備されている。

深化学習期の小学校の初級第2年（CE2）では、「本を選んで借りるために、いつも通っている図書館で場所が分かる」ことである。中級第2年（CM2）では、「図書館やメディアセンターで場所が分かる」ことである¹⁸⁾

2.-2. 読書量

図書館利用の目標と共に、読書の量も目標に掲げられている。基礎学習期の小学校の最初の学年（CP 準備学年）では、「作品全体、特に児童文学を全部読んでもらい聞く」。第2学年（CE1 初級第1年）では、文学作品という限定はないが、「短い作品全体か、より長い作品の大分量の抜粋を聞くか読む」とあり、準備学年から一歩進んで、「特に児童文学の作品全体を読むか、読んでも

らい聞くかする。そして読んだ本を紹介する¹⁹⁾となっている。最終的に「文学」の項目の目標は、初級第2年では1冊か長編の断片、中級第1年では3学期の各学期に1冊、中級第2年では1年に5冊である。

2.-3. 読解

フランス語の「読むこと」の最大の特徴は、まず第一に、作品を理解すること、つまり文学作品の分析方法を学び、批評をする能力を身に付けることであるようだ²⁰⁾

「文学」と分けられる前の基礎学習期においては、基礎学習期の第2学年(CE1初級第1年)で、「読んだ短編の物語の登場人物・出来事・時間と空間の状況を突き止める²¹⁾」ことが目標とされている。

この目標に即して、ガリマール社の『三匹のコブタ』では、基礎学習期用に、物語の登場人物や出来事や時間と空間の状況を見つけ出す練習問題がある。物語の登場人物とイラストを結び付ける練習では、わらや木やレンガで家を作るコブタや、リンゴを追いかけるオオカミのイラストと、描写する文を結ぶようになっている。また、物語の六つの出来事を時系列で並べる問題が作成されている。初級1年向けのプリントでは、作品の理解のために、オオカミが三番目のコブタをどこに連れて行こうとしたか二つ書くような問題もある。また、『すばらしき父さん狐²²⁾』では、登場人物である狐のステレオタイプについての資料が作られている。これまでに読んだ本の中の狐を思い出し、この物語の狐の性格を予想する設問と、物語を読んだ後に狐について分かったことを尋ねる設問である。

「読むこと」と「文学」が分けられる深化学習期では、「読むこと」で、基礎学習期の「読むこと」で学んだ文学作品の分析的読解がさらに深化され、テキストを詳細に分析して理解する精読の技術を身に付けることに重きが置かれている。これは4章の比べて読むことにおいて詳しく見ていくが、「読むこと」で学んだ分析の方法を使い、並行して「文学」の授業では、他の作品と関連付けることが目標とされているようである。

さて、深化学習期の小学校の初級第2年（CE2）では、音読や黙読などの指示に続いて、短編の物語については以下の三つの点に基づいて読むことが指示される。「一人の登場人物を指し示す様々な言葉の目印」²³⁾・「出来事の時間的な前後関係を正確に理解するために、動詞の時制や時間関係を表すつなぎ言葉」・「登場人物のセリフを見つけるコロンや引用符」。また「ドキュメンタリーや描写や語りのテキストを読み、テキストの要点（テキストの主題、描写の対象、物語の粗筋、登場人物の関係）を言葉や文字にする」とある。中級第1年（CM1）では、同様に音読や黙読などの方法の指示に続き、さらに「短編の物語や描写中で、筋立ての場所や描写された場所の配置を正確に理解するために、空間関係を表すつなぎ言葉や場所の補語に基づく」とある。ここでは、文の成分にまで細かく着目して学習していることが分かる。「特に語彙に基づいて、描写や物語や詩のテキストの雰囲気や調子を捉える」。小学校最終学年の中級第2年（CM2）では、音読の指示があり、さらに「筋立てや論理のつながりを正確に理解するために、論理関係を表すつなぎ言葉や表現に基づく」とある²⁴⁾。

このように本を読むことの基本として、テキストを細かく丁寧に読み、理解することが指導される一方で、さらに深化学習期においては「読むこと」の中で、自らの解釈を述べることが求められていることは、たいへん重要な点である。

2.-4. 解釈

深化学習期の中級第1年（CM1）では、「読むこと」の中で「あるテキストについてのディスカッションに参加し、論拠を示しながら、自分の解釈を他のものに対立させる」²⁵⁾と書かれているが、同じ学年の「文学」の中では学習した能力をそのまま文学作品について話すために使い、「ある作品についてのディスカッションに参加し、論拠を示しながら、自分の解釈を他のものに対立させる」となっている。

教育資料には、作品の読解だけではなく、解釈に関わる提案も存在する²⁶⁾。例えば、Écolire では、『おおきな木』²⁷⁾ について、まず作品を理解するための手引きが示される。これは、ある一本の木と少年の物語である。幼い少年と木は愛し合っていて、一緒に遊んでいるだけで幸せである。少年は成長し、次々と別の欲求が生じて木に要求する。木は少年に自分のすべてを与える—りんご、枝、幹。旅に出た年老いた少年は、最後に戻ってきて、切り株だけになった木に腰かけるが、木はそれだけで幸せである。作品の理解のため、教育資料では、テキストと絵を結び付ける、テキストや絵の中に時間の流れを読み取る、複数のテキストの抜粋を準備し、それを物語の流れに沿って並べるなどの設問を準備している。資料ではさらに、作品の解釈についてディスカッションのテーマを与えている。それは、この作品において「少年と木は、どちらが幸せか？ またそれはなぜか？」という、たいへんこなれた問いを準備している。というのは、この作品の木と少年の関係は、両親と子ども、母と子どもの関係を容易に連想させ、子どもが自分を木の立場に置いて考えることは難しい。「どちらが幸せか」と問われることで、木という登場人物に感情移入して考えてみて、子どもの立場と比べてどちらがいいかを選択できる。さらに、なぜかという質問に対して、物語の内容に即して論拠を示して答える練習をすることになる。

作品を解釈することは、学校での読解の学習が土台にあることは言うまでもないが、それだけに留まらず、子どもたちのそれまでの読書経験、子ども自身の感受性や考え方にも関わることである。解釈は読書の醍醐味とも言えるものであり、授業で取り扱う作品に子どもが感情移入したり、主人公を自己同一視したりすることができれば、幸運な読書体験と言える。その際に、選書や作品を紹介する大人の導入の仕方も大切なポイントとなる。この点においては、フランスの教育資料や作品紹介では、しばしば秀逸なアプローチに出会うことがある。例えば、有名な『かいじゅうたちのいるところ』は、版元のエコール・デ・ロワジュール社²⁸⁾ が web 上で質問を用意しているが、それは、「あなたはお

母さんに叱られた時、何を考えますか？」というものである。この問いは子どもたちの心をつかみ、作品冒頭で、母親に叱られたいたずら坊主のマックスが、怪獣の住む島、空想の世界へと旅立つ場面へと、子どもたちの生の体験を引き寄せる問いかけである。

3. 「文学」・「読むこと」と、「口頭言語」・「書くこと」

3.-1. 「文学」・「読むこと」と、「口頭言語」

「文学」の領域において目標とされている、読んだ作品を紹介するという活動は、基礎学習期から「口頭言語」の授業で練習される。

基礎学習期の小学校の最初の学年（CP 準備学年）では、「口頭言語」で「だれかに読んでもらった物語を理解したことを、質問に答える形で明らかにする」・「物語の主要人物がわかる」とある。さらに「すでに聞いたことのある話について、イラストに基づいて物語る」ことや「暗唱」が提案されている。また「読むこと」では、文学作品という限定はないが、「読んだテキストが誰について、また何について書かれているか言う」。小学校第2学年（CE1 初級第1年）では、「読むこと」で、「作品全体、特に児童文学の作品全体を自分で読むか、読んでもらい、自分の読書について紹介する」こと、または句読点やイントネーションに気をつけて、二人で対話の形式で読むことなどが提案されている²⁹⁾

国民教育省の選書リストを見ると、上記の準備学年の目標に即して、基礎学習期においては、「絵本」のリストが二つに分けられ、「絵本／絵だけの絵本」と「絵本／他の絵本」の項目になっている。言葉のない絵本には、『ピエロ君』や『ズーム』や『なみ』等が挙げられている。言葉のない絵本は、もちろん、ヴィジュアル・アートで使用されることもあるが、それだけではなく、フランス語の授業でも使用されている。言葉がないために、かえってそれについて語るのに適しているからであろう。

例えば、安野光雅の『旅の絵本』³⁰⁾には、他の芸術作品へのたいへん豊富な

引用がある。言葉のない絵本であるため、自分の見つけたものについて発表する子どもは、それを見ていない別の子どもになんとか工夫して説明することになる。主人公は見開きのページごとに現れる騎士で、灰色の服を着て風呂敷包みを抱えてある国を訪れる。見開きいっぱいに使った俯瞰の画面から、騎士を探し出すのはたいへん楽しい作業である。村や町や野原を横切りながら、子どもたちはその中に自分の知っている引用を見つけ出す。文学では、眠れる森の美女、裸の王さま、長靴をはいた猫、赤い風船、大きなかぶ、赤ずきんちゃん、肉をくわえた犬、ドン＝キホーテなどが引用されている³¹⁾ フランスの版元のエコール・デ・ロワジール社³²⁾では、web上の教育資料の「目印」のページに引用の典拠が示してあり、昔話にはリンクが張られて、お話のテキストを読むことができるようになっている。

また、オルレアン＝トゥールの大学区³³⁾では、国民教育省の推薦図書であるフレデリック・クレマンの『アリスの不思議なお店』³⁴⁾を、話したり、書いたりする授業例として提案している。さながら宝石箱のようなこの本のイラストは、ペンで描いた線画や写真やパステル画が入り混じって、テキストの間に挿入されたものである。冒頭では、「ふしぎなもの売る」行商人の語り手がアリスの誕生日に、コレクションをお目にかけると言う。教育資料の配布用プリントに挙げられた数々の引用は、ピノキオのこわれた鼻の先っぽ・長靴をはいたネコの口ひげ二本・親指小僧の小石・親指姫の乗っていたバラの花びら・シバの女王・白雪姫のおしろい入れ、口紅、靴下留め・眠れる森の美女の糸巻き棒・シンデレラの七つの笑いのかけらとガラスの靴の六つのかけら・青髭・星の王子様・千一夜物語・不思議の国のアリスなどである。授業案としては、作品の中に昔話に出てくる品物や、昔話の引用や、その他の引用作品を探し出し、口頭で紹介するか、皆で話し合うこと。さらに書いたり、話したりする授業の方法としては、引用の物語を語る、この本の中で見つけた品物をリストアップし、元の話の中に置き直してみる（「親指太郎の石は何の役に立っていたのか？」）ことが提案されている。

通達に戻ると、深化学習期の「口頭言語」では、文学に関しては、初級第2年（CE2）において「正しい文章で適切な語彙を使って表現しながら，[…]自分が聞いたことのある物語を知らない第三者のために，構成のしっかりした分かりやすい物語を作る，物語を考え出したり修正したりする」という目標がある。また，初級第2年（CE2），中級第1年（CM1），中級第2年（CM2）を通じて，発表や意見交換やディスカッションと並んで，散文や詩の暗唱が目標とされている³⁵⁾

通達中に目標として掲げられた，物語を考え出す，つまり創作の授業案として，エクス＝マルセイユの大学区³⁶⁾は，基礎学習期用に「落下」というテーマの作品として，木村ゆういちの『ゆらゆらばしのうえで』³⁷⁾を取り上げている。この物語では，キツネに追いかけられたウサギが，大雨で壊れかけた丸太橋に飛び乗る。続いてキツネも飛び乗ったところで，土手の石が崩れ，丸太橋がゆらゆらするシーソーになってしまう。敵同士の二人は，平衡を保つために助け合わなければならない。群れ寄るカラス，怖い夜，眠気…，二人は励まし合い，協力して切り抜ける。最後に，夜明けの風が丸太をぐるぐる回し始めたところで，「2ひきのからだはまるたにふりまわされてズルズルとさきっぽのほうに…」ここで教育資料では，物語の続きを想像して，発表する，書く，または絵を描いてみることを提案している。生徒は物語の主人公になって考えるため，作品理解が確実なものになり，同時に作文の練習にもなる。

エコール・デ・ロワジール社は通達の目標に即して，自社の書籍に教育資料を付け，ディスカッションのテーマを提案している。先に引用した『かいじゅうたちのいるところ』の他にも，『夢のイチジク』³⁸⁾には「お金があれば幸福になれるか？」などがある。

最終的に「文学」の領域では，特に基礎学習期の「読むこと」と「口頭言語」両方から発展してきた項目が含まれている。先に訳出したように，初級第2年（CE2）では，「読んだ作品を紹介する，それらについて自分の意見を述べる」，

「数年前または数カ月前に読んだ物語を、暗記して語る。またはイラストを見ながら語る；題名を知っている」とある。また、中級第1年（CM1）では、2章で論じた、ディスカッションがある。中級第2年（CM2）では、これまでの話す学習を活かして、自立した読者として、自分の読書について話すことが求められている。「選んだ本や、自分の好みについて明確に述べる」、「読んだ1作品について暗記して語る；特徴的な1節をそらで引用する」、「文学作品同士を、口頭または筆記で比較する」。

3.-2. 読むことと書くこと・作文

書くことについては、基礎学習期ではまずは、正しい文字・文が書けることが目標となっているが、第2学年（CE1 初級第1年）では、徐々に長い文を書き、最後には5～10行の物語文や説明文が書けるようになると設定されている。深化学習期になると、書くことに加えて「作文」の領域が現れ、書くものも創作と批評両方の学習が行われている。「作文」では初級第2年（CE2）では、登場人物を作り時制を使いこなしながら短い物語を書いたり、中級第1年（CM1）では、様々なタイプの文章（物語・描写・ポートレート）を書いたり、中級第2年（CM2）も同様で、他にも詩的テキストを書いたりしている。

「文学」の領域では、先に訳出したように、小学校最終学年である中級第2年（CM2）で「文学作品同士を、口頭や筆記で比較する」という目標があるが、それ以前の初級第2年（CE2）ですでに比べる物差として「テキスト同士、作品同士を関連付ける：同じ作家、同じテーマ、同じ登場人物など」と明記されている。これは、基礎学習期の読むことにおいて、テーマや登場人物や出来事や結末を比べて読む学習をしてきた延長にある。

創作のアイディアとして、国民教育省のリストでは、『ジュマンジ』³⁹⁾を用いて書くことが提案されている。『ジュマンジ』では、主人公ジュディットとピエールが両親の留守中に、ゲームの箱「ジュマンジ」を見つける。ルールの紙を読みゲームを進めると、それが現実になり、ライオン、さる、ヘビ、サイが

突如現れる。二人は、現実とフィクションが混じり合うファンタジーの世界に入り、両親が招待客と帰ってくるところでやっと目が覚める。子どもたちが自分たちの冒険を語る傍で、別の子どもたちがゲームの箱を運んで行く。国民教育省のコメントでは、このゲームの続きを生徒に書いてみるよう言っている。

エクス=マルセイユの大学区では書くことの授業として、『ペドロの作文』⁴⁰⁾を使って、主人公と同じ立場で作文を書くという案が作成されている。この作品の舞台は、軍事クーデターの起こったチリである。主人公のサッカー少年ペドロは、街中で軍人を見かけたり、両親が夜に家で遠くからのラジオを聞いたりと少しずつ周りが変化していくのに気が付く。ある日、「独裁」に反対する、友人ダニエルの父親が軍人に連れて行かれる。ペドロはこの言葉の意味を知ろうとするが、はっきりとは分からない。翌日、教室に大尉がやって来て、生徒たちに作文のコンクールに参加するように言う。題は、「わが家の夜のすごしかた」である。ここが物語の重要な局面となり、ペドロが何を書いたのかは物語の最後で明らかになる。エクス=マルセイユの大学区のwebサイトでは、県のグループが教育資料を作成している。この転換点では子どもが物語を理解できているかと同時に、どのように解釈するかが問題となり、「独裁」の概念を知るには、歴史文化的背景を参照するよう書かれている。さらに県の資料では、この部分で具体的に書くことと話すことの授業案を提示している。書く作業として提案されているのが、生徒に「パパが仕事から帰ってくるとき、…」⁴¹⁾に続く作文を書いてもらうことである。これも、子どもが主人公の立場になって考える、たいへんすぐれた課題である。

4. 比べて読むこと

比べ読みと広げ読みは、フランスの読書教育の最大の特徴ではないだろうか。フランスでは、学校では分析的な読み方を学習するという事に留まらず、子どもの好奇心を刺激する方法で数多く本を読ませる戦略が講じられてい

るようである。

「文学」と「読むこと」が分けられる前の基礎学習期においては、小学校の第2学年、初級第1年（CE1）で、「読んだ短編の物語の登場人物・出来事・時間と空間の状況を突き止める」ことや、「つい最近読んだり聞いたりしたテキストを、知っているテキスト一つまたは複数と比べる（テーマ、登場人物、出来事、結末）」が目標になっていた⁴²⁾ 注目に値するのは、早くから比べて読むことが目標とされていて、作品を構成する要素を分析的に読むことが、他の作品と照らし合わせる時の物差として役立っていることである。

先に訳出した深化学習期の「文学」の領域では、小学校最終学年である中級第2年（CM2）で「口頭や筆記で、文学作品を比較対照する」という目標があるが、それ以前の初級第2年（CE2）で比較の指標として「テキストや作品を関連付ける：同じ作家、同じテーマ、同じ登場人物など」と明記されている。これは、基礎学習期の読むことにおける、テーマや登場人物や出来事や結末を比べる学習の延長にある。

重要なことは、この目標が国民教育省が作成した選書リストにも反映されていることである。深化学習期ではコメント入りのリストにおいて、大部分の推薦作品に、比べて読むべき作品が紹介され、その比べ方も明確に述べられている。基礎学習期でも、リストアップされた本をよく見てみると、対比できるよう周到な選書がなされている⁴³⁾

4.-1. 比べ読みの方法

作品の比較の仕方は多岐にわたり、ここですべてを網羅することはできないが、以下に特徴的なものをいくつか紹介する。

第一に、同じ作家の作品を比べることである。国民教育省の選書リストでは、ピーター・シスの『三つの金の鍵 魔法のプラハ』は同じ作者の別の作品『マドレンカ』と比べてみることが示されている。ピーター・シスはチェコ出

身の移民でアメリカに移住した。『マドレンカ』は主人公の少女が、アメリカの自分たちの住む街で様々な国から来た住人の家を一回りするという話である。『三つの金の鍵 魔法のプラハ』の献辞では、作者が愛娘マデリンにプラハの街を紹介すると書いていて、作品中では、語り手は生まれ故郷のプラハを黒猫に導かれて巡りながら、自分の子どものころの思い出とその街の三つの伝説を語るというものである。三つの伝説は、語り手が子どもの頃に聞いた話で、順に、伝説の皇子ブルンツヴィークとカレル橋の話、プラハのユダヤ人を護るゴーレムの話、時計職人ハヌシュ親方の天文時計の話である。それぞれの話の後、語り手である主人公は鍵を一つずつ手に入れ、それを持って、子どもの頃の我が家の扉を開ける。そこでは母さんがご飯を準備していて、すべてが息を吹き返すところで、自分の娘マデリンのいる今に戻るのである。選書リストではさらに、子どもの頃の回想という同じテーマを取り扱った、やはり亡命作家である、ハンガリー出身でアメリカに移住したアイザック・シンガーの作品と比べてみることも提案されている⁴⁾

同じ作家の作品については他にも、オールズバーク『ジュマンジ』が、作者自身の他の作品『西風号の遭難』や『魔術師アブドゥル・ガサツイ』や『いまましい石』と比べて読むよう提案されている。

第二に、挙げられた数々の昔話の原典に並べて、それらの再話を取り揃えられ比較の対象となっていることである。

例えば、グリムの「漁師とおかみさんの話」は、国民教育省のコメントでは、安野光雅の『きつねがひろったグリム童話』と比べて読むという案が紹介されている。これは、分割ストーリーになっていて、字の読めない父さんきつねが、字が読めるふりをして、子どものコン君に、絵本の絵を見ながら別のお話を語るというものである。見開きの上大部分がグリムのお話、下の部分のテキストはコン君に語るきつね父さんのお話である。エクス=マルセイユの教育資料では、グリムの話に比べて読むために紹介されているのは、まずは国民教育

省のコメントやリスト中の他の作品、次にグリムの他の作品、さらには「変身」のテーマの作品が紹介されている。その中には、赤羽末吉の絵、矢川澄子の文による『つるようほう』も紹介されている。

同様に「三匹のコブタ」が挙げられている。推薦図書には、エリック・ブレッグヴァッドの絵による版が挙げられているが、この版は、元のアングロサクソンの民間伝承に近いものである。ブルーノ・ベッテルハイムが書いているような、最初の二匹の子ブタがオオカミに食べられてしまう話である。この作品と同時に、ユージーン・トリビザスの『3びきのかわいいオオカミ』⁴⁵⁾が入っている。この話は、三匹のちびオオカミが建てるレンガやコンクリートや鉄骨の家を、大ブタがハンマーや電気ドリルやダイナマイトで次々と壊してしまうが、最後に建てたお花の家は大ブタを改心させ、最後は皆で幸せに暮らすというハッピーエンドである。明らかに、子どもが二つの話についてたいへん比較しやすい。登場人物の入れ替わり、類似した物語、結末の違いなどである。版元であるガリマール社は、教員用に教育資料を提供している web サイトで、国民教育省の推薦図書に挙げられているエリック・ブレッグヴァッドの絵による三匹の子ブタ版に、学習のための様々なプランを準備し、13ページにわたる教育資料を提案している⁴⁶⁾。ガリマール社の教育資料では主要人物のオオカミについて、赤ずきんちゃんや、オオカミと七匹の子ヤギと比べてみるのが発展的学習として書かれている⁴⁷⁾。

昔話とその再話やパロディは、他にも枚挙にいとまがないほどである。並べて紹介されているものをいくつか挙げると、アンデルセンの「マッチ売りの少女」には、トミー・ウンゲラーの『マッチ売りの少女アルメット』、イソップとラ・フォンテーヌ、ラ・フォンテーヌにはトニー・モリソン、グリムの「漁師とその妻」には安野光雅の『狐がひろったイソップ童話 漁師とその妻』、ピエール・グリパリの作品同士、「くるみわり人形」にはチャイコフスキーやモーツァルト、シャルル・ペローにはウォルト・ディズニーの映画、『狐物語』にはロアルド・ダールの『すばらしき父さん狐』などなどである。

第三の特徴としては、国民教育省のリストでは同じジャンルの作品を比較している。例えば、ファンタジー作品として、クヴィント・ブーフホルツの『見えない道のむこうへ』⁴⁸⁾が挙げられている。これは、後にバイオリンの先生になる少年と画家のマックスとの友情物語である。少年は同じ家に越して来たマックスのアトリエで、彼が絵を描くのを眺めたり、彼の奇妙な旅の話——カナダの雪象や空飛ぶサーカスワゴンなど——を聞いたり、得意なバイオリンを弾いたりする。描き終わった絵は、裏返しにアトリエの壁に並べられ、マックスの旅行中に少年は初めてそれらの絵を見る。その絵はマックスの旅の話で聞いたような非現実的で奇異なものである。少年は、マックスの絵を眺め、空想の世界を旅する。マックスは師として、少年を夢や自分自身の内面へと導く。この作品は、このように想像力の優位を唱えるファンタジー作品であり、クリス・ヴァン・オールズバーグの『ハリス・バーディックの謎』⁴⁹⁾と比べて読むことが提案されている。この作品では、ハリス・バーディックが現実の作者のオールズバーグに14枚の絵を託し、失踪してしまったので、オールズバーグが、彼の残した絵とそれに付いていた題名と短い説明文と一緒に出版するという設定である。『見えない道のむこうへ』のマックスの絵と絵に添えられた短文は、見事にハリス・バーディックの絵と説明文に呼応している。

ジャンルの視点からは国民教育省のリストには、オールズバーグ『ジュマンジ』と、同じファンタジーの作品として、アンソニー・ブラウンの『かわっちゃうの?』⁵⁰⁾などが挙げられている。

第四の比較の方法として、国民教育省のリストを見ると、語りの手法によるものも挙げられる。選書リストで紹介されているのは、『コブタカタブラ』⁵¹⁾である。この物語では、コブタの女の子の語りが駆使されている。コブタの女の子は学校に行かずに帰宅して、家族に信じられないような話をする。バスを間違えて、森を通るとオオカミに出逢う。自分を食べようとするオオカミは、字

が読めないので、料理の本を読んであげるふりをしてスープのレシピを考え出し、危険な場所に材料を取りに行かせる。最後はカイカイグサという草の茂みに行かせた上で、魔法の呪文をかけると嘘をついて、かゆみでオオカミをやっつける。読者がこの半信半疑の話が嘘か本当か分かるのは、絵本の最後のページである。次の日バスの中でコブタの女の子が友達に自慢をするイラストと並べられているイラストでは、字の読み方を覚えるオオカミがブツブツで腫れ上がり「ブタはしんようできねえぜ!」と言っている。この疑わしい語り手の物語は、推薦図書である『キラーキャットのホラーな一週間』⁵²⁾へのコメントで比べられている。アン・ファインのこの作品は、フランスで人気の作品で、語り手の猫の日記体小説である。この猫がおとなりのウサギを殺したのかどうか、読者は猫の日記と家族の話との間で判断がつかないまま、テンポのいい物語の展開に引き込まれ予測不可能な結末となる。

以上、比べ読みの例を挙げてきたが、このようにフランスでは、一つの作品から次々と作品を読み広げられるよう、国民教育省や大学区や出版社によって多彩な作品が紹介されている。どのような本を読むかは、どのように本を読むかと同様、たいへん重要なことである。多数の出版物が氾濫する中、逆に良い本が選びにくくなっている現代では、選書の作業は必要不可欠であるように思われる⁵³⁾。

4.-2. 比べ読みの実践報告

児童文学とその教育の専門家であるクリスチヌ・コナン＝パンタドーによれば、氏はある学校で、アンヌ・ベルティエによる赤ずきんちゃんのリライトである *Mon loup* 「私のオオカミ（未訳）」(1995) という絵本と他の作品を関連付けて読ませようとするフランス語の授業に参加したことがあった。教員は、この絵本の複雑な語りの読解をさせる際、この絵本と比較できる作品を勧める代わりに、生徒たちに家にある赤ずきんの本を持って来るように言い、自

分自身もペローとグリム兄弟のバージョンを持ってきたそうである。子どもによって集められた本は、ディズニー映画に影響された大衆向けの出版物の数々であった。持ち込まれた作品は種々雑多で比べることが難しくなり、絵本の読解に役立つものでも、子どもの教養を豊かにするものでもなかったということである⁵⁴⁾。この例からも、適切な選書は必須であることが分かる。

国民教育省の選書リストでは本の版についても細かい指摘があり、例えば、アンデルセンの「鉛の兵隊」には、グラッセ・ジュネス、ガリマール・ジュネス、フラマリオン、カレイドスコープの四つの版が挙げられている。また、シャルル・ペローの話も、ディズニーですでに知っているはずと言及しながらも、ギュスターヴ・ドレと現代イラストレーター 10 名になる版が紹介されている。

比べ読みは、なにより多読へと繋がるすぐれた方法である。また他の作品や他の作家と比べて読むことによって、その作家がいかに作品の中で表現し、何を伝えようとしているのか、より深くより広く読むことが可能である。これは情報に溢れる現代社会において、誰がどのような意図で書いているかを探り、よりよい情報を選び取る訓練ともなる。

結 語

以上、教育プログラムと「段階的学習」の通達、その目標に達するために作られた教育資料を分析してきた。概括的ではあるが、文学作品の読解と解釈、口頭や筆記による表現への発展、作品を読み比べ、読み広げる方法など、フランスの読書教育やその読書教育を支援する仕組みについて、ある程度明らかにできたのではないと思う。

今後は、今回取り上げられなかった「小学校における文学的教養」⁵⁵⁾ という通達の分析を通じて、教育プログラムには盛り込まれていない読書活動も調べることで、さらにフランスにおける読書教育・読書支援について研究していきたい。

*本論文は、2014年度国内研究の成果の一部である。

注

- 1) カトリーヌ・ドルト, コリーヌ・フォール=ボワレ作・フレデリック・マンソー絵『おこる』安積みづの・越智三起子訳, エスコアール出版部, 2012年。
- 2) 辻由美『読書教育 フランスの活気ある現場から』みすず書房, 2008年。
- 3) 正式には国民教育高等教育研究省。以下, 国民教育省と省略する。
- 4) 根本彰・足立幸子「第6章 フランス共和国調査報告」83-103頁, 国立青少年教育振興機構 web サイト
www.niye.go.jp/kanri/upload/mentor/76/File/gaikoku6.pdf (2016年3月22日に最終アクセス)。
- 5) 同上, 87頁。
- 6) 同上, 84頁。
- 7) オルレアンのトゥール大学区では, 県のグループが読書のための教育資料を作り, web サイトで公開しているが, これは非識字撲滅のための行動の一環である。
オルレアン=トゥール大学区
http://www.ac-orleans-tours.fr/fileadmin/user_upload/ia28/doc_peda/MDL/presentation.htm?smenu1 (2016年3月22日に最終アクセス)。
国民教育省の web サイトでは, 「非識字撲滅のために行動する」ことを掲げ, 幼稚園から義務教育期間を通して, 非識字を予防することが国民教育省の任務の核心としている。この呼びかけに呼応して様々な取り組みが行われている。
国民教育省 Éduscol
<http://eduscol.education.fr/cid52346/agir-contre-l-illettrisme.html> (2016年3月22日に最終アクセス)。
- 8) 国立教育ドキュメンテーションセンターと支部の教育ドキュメンテーション資源センターの新しいネットワークである。国民教育省の監督下にあり, 多メディアの(印刷, デジタル, モバイル端末, TV)の教育資源を発行し, 教育現場の要求に応じている。根本によれば, フランスでは教員が資料や教材に自由にアクセスできるこのようなナショナル・センターが1980年代から存在し, これはヨーロッパでもフランスが唯一だということである(根本彰「第6章 フランス共和国調査報告」p.93)。
- 9) Éducasources
<http://www.educasources.education.fr/> (2016年3月22日に最終アクセス)。
- 10) 「小学校のための段階的学習 (2016年6月まで)」国民教育省 Éduscol
<http://eduscol.education.fr/cid58402/progressions-pour-l-ecole-elementaire.html> (2016年3月22日に最終アクセス)。
「準備級と初級1年のための段階的学習/フランス語」国民教育省 Éduscol

http://cache.media.eduscol.education.fr/file/Progressions_pedagogiques/78/6/Progression-pedagogique_Cycle2_Francais_203786.pdf (2016年3月22日に最終アクセス)。

「初級2年と中級のための段階的学習／フランス語」国民教育省 Éduscol

http://cache.media.eduscol.education.fr/file/Progressions_pedagogiques/75/9/Progression-pedagogique_Cycle3_Francais_203759.pdf (2016年3月22日に最終アクセス)。

- 11) この通達はまだ、共通知識技能（コンピテンシーズ）を段階的に身に付けるものであるということである。共通知識技能とは、国民教育省のwebサイトによれば、学問分野を基にした教科とは別に、現在七つの必要不可欠な知識および技能の共通基礎が設定されている（1. フランス語の習得, 2. 外国語の実践, 3. 数学の主要基礎原理と科学・技術文化, 4. ICTの習得, 5. 人文的教養, 6. 市民としての社会的能力, 7. 自律性と自発性）。これらの共通知識技能は、教科をまたいで学習される。ちなみに、共通知識技能は2016年の新学期からは五つとなる。

「知識および技能の共通基礎」国民教育省 Éduscol

<http://www.education.gouv.fr/cid2770/le-socle-commun-de-connaissances-et-de-competences.html#les-sept-competences-du-socle-commun> (2016年3月22日に最終アクセス)。

- 12) 国民教育省のHPでは、2013年と2007年の選書リストが並べられている。リストには作家名・書名・出版社・難易度（1～3）が示されている。2013年の基礎学習期には、言葉のない絵だけの絵本が13冊、その他の絵本が106冊、漫画が27冊、昔話や寓話が33冊、数え歌・ABC・言葉遊びが9冊、詩が21冊、小説と挿絵入り物語は52冊、戯曲は9冊である。2013年の深化学習期には、絵本が62冊、BD漫画が28冊、様々なレベルの昔話や寓話が35冊、詩が37編、小説とイラスト入り物語が114冊、戯曲が24冊挙げられている。選書リストのページの下の方には、ジャンルごとのファイルが準備され、そこでは各作品に説明がついている。その付属資料は、2004年度のもので、児童文学の専門家クリスティアン・ポスラニエックの監修の下に作成されたものである。説明は、正確な書誌、短い紹介文、教育的効果のあるすぐれたプラン、読書の難易度が示されている。示された指導プランの中には、比べ読みのため、他の作品との関連付けも多い。

国民教育省 Éduscol

<http://eduscol.education.fr/cid50485/litterature.html> (2016年3月22日に最終アクセス)。

- 13) 国民教育省 Éduscol

http://www.education.gouv.fr/bo/2008/hs3/programme_CE2_CM1_CM2.htm (2016年3月22日に最終アクセス)。

- 14) 国民教育省 Éduscol

<http://eduscol.education.fr/cid50485/litterature.html> (2016年3月22日に最終アクセス)。

国民教育省 Éduscol

http://cache.media.eduscol.education.fr/file/Progressions_pedagogiques/75/9/Progression-pedagogique_Cycle3_Francais_203759.pdf (2016年3月22日に最終アクセス)。

- 15) 「準備級と初級1年のための段階的学習」2頁。
- 16) ロアルド・ダール作、クエンティン・ブレイク絵『どでかいワニの話』柳瀬尚紀訳、(ロアルド・ダールコレクション8) 評論社、2007年。
- 17) ガリマール社/ガリマール=ジュネス(児童書)/教育のためのガリマール・サークル
<http://www.cercle-enseignement.com/feuilletage/swf/25180/1> (2016年3月31日に最終アクセス)。
- 18) 「初級2年と中級のための段階的学習」2-3頁。
- 19) 「準備級と初級1年のための段階的学習」2頁。
- 20) 前述の報告で、足立は、中学や高校の卒業試験や国民教育省の通達などを調べ、「様々な文献や作品を実際に読み、分析し、探究したり批評したりするような授業が行われている」ことを明らかにしている(足立「第6章 フランス共和国調査報告」87頁)。
- 21) 「準備級と初級1年のための段階的学習」2頁。
- 22) ロアルド・ダール作・クエンティン・ブレイク絵『すばらしき父さん狐』柳瀬尚紀訳、(ロアルド・ダールコレクション4) 評論社、2006年、116頁。
ガリマール社/ガリマール=ジュネス(児童書)/教育のためのガリマール・サークル
<http://www.cercle-enseignement.com/feuilletage/swf/37571/1> (2016年3月22日に最終アクセス)。
- 23) フランス語では、一つの言葉、例えば「オオカミ」という繰り返しを避け、別の言葉で言い換えるのがよいとされている。本の中で、オオカミが「悪者」とか「悪賢いやつ」と言い換えられると、子どもはそれを3名の登場人物と数えてしまう。
- 24) 「初級2年と中級のための段階的学習」2-3頁。
- 25) 同上、3頁。
- 26) 例えば、国民教育省のリストでは、ドーデの『スガンさんのやぎ』と反対の内容の話として、ラ・フォンテーヌの『寓話』の「犬とキツネ」を挙げ、反論するのに役立つと明記している。
- 27) シェル・シルヴァスタイン『おおきな木』村上春樹訳、あすなろ書房、2010年。
- 28) エコール・デ・ロワジュール社/エコール・デ・マックス
http://www.ecoledesmax.com/espace_regroupeurs/pages_activites_an4/kilimax/kili6/kili_6_reg.php (2016年3月31日に最終アクセス)。
- 29) 「準備級と初級1年のための段階的学習」1-2頁。
- 30) 安野光雅『旅の絵本』福音館書店、1997年。
- 31) 絵画では、ゴッホやミレーやクールベやスーラなど、映画では駅馬車、また音楽ではベートーベンなども見つけることができる。
- 32) エコール・デ・ロワジュール社/エコール・デ・マックス
http://www.ecoledesmax.com/espace_regroupeurs/pages_activites_an4/animax/ani8/ani_8_reg.php (2016年3月31日に最終アクセス)。

33) 国民教育省の web サイトでは、「非識字撲滅のために行動する」ことを掲げ、幼稚園から義務教育期間を通して、非識字を予防することが国民教育省の任務の核心としている。この呼びかけに呼応して、様々な取り組みが行われているが、大学区では、県のグループが読書のための教育資料を作っている。国民教育省 Éduscol

<http://eduscol.education.fr/cid52346/agir-contre-l-illettrisme.html> (2016年3月22日に最終アクセス)。

オルレアン＝トゥールの大学区の非識字撲滅運動グループの web サイトでは、非識字撲滅の四つの柱の一つとして、県の活動を活性化するため、生徒のためのアクションを拡大させること・教員のための資料を増やし多様化させること、県の web サイトを通じて、情報を発信しコミュニケーションを図ることが挙げられている。具体的な企画は、Écolire・詩の教育・綴り方チャレンジである。このÉcolireのページは、cycle1 から 6e までの文学教育に関する教育プログラムの実現を助けるものであり、選書リストの作品に教育資料を作成している。

オルレアン＝トゥール大学区, Écolire

http://www.ac-orleans-tours.fr/fileadmin/user_upload/ia28/doc_peda/MDL/presentation.htm?smenu1 (2016年3月22日に最終アクセス)。

http://www.ac-orleans-tours.fr/fileadmin/user_upload/ia28/doc_peda/MDL/ecolire.htm?smenu2 (2016年3月22日に最終アクセス)。

34) 『アリスの不思議なお店』フレデリック・クレマン作, 鈴木和成訳, 紀伊國屋書店 [1997年] 2001年。

35) 「初級2年と中級のための段階的学習」1頁。

36) この web サイトはたいへん充実しており、作品の紹介(国民教育省のメモと作業グループのメモ)・利用可能な主軸となる勉強三つのコース(読むこと・書くこと・話すこと)・授業のための展開・使用可能な本のネットワーク・教員のための補助的道具箱を準備している。基礎学習期では、八つの視点(テーマ「落下」・語りの構造・語り手・テキストとイメージの関係・本の中の本・時間の使い方―夢の物語・哲学的ディスカッション・登場人物間の関係)から比べ読みができるよう、それぞれリンクが貼られ、開いてみると推薦書リストまたはそれ以外の作品に教育資料が付いている。これらの切り口は、ジャンルやテーマだけには限らないより掘り下げた読み方が求められるものである。また、深化期の推薦作品にはほとんどの作品に、県のグループが教育資料を作成しているが、2～3ページある資料の最後には、必ず、比べて読む作品が挙げられている。それには、選書リストや他の作品の出典も掲載され、比べ方も必ず示されている。

エクス＝マルセイユの大学区

<http://www.maitrise-langue-84.ac-aix-marseille.fr/spip/> (2016年3月22日に最終アクセス)。

37) きむらゆういち文, はたこうしろう絵『ゆらゆらばしのうえで』福音館書店, [2003年] 2013年。この本の延長としては、『狐物語』などキツネの原型と比べて読むこと、擬音語

や感情を表す語彙などフランス語の勉強、理科や図工や音楽などのアイデアが挙げられている。

- 38) エコール・デ・ロワジール社／エコール・デ・マックス

<http://www.ecoledesmax.com/livre-60092> (2016年3月31日に最終アクセス)。

- 39) クリス・ヴァン・オールズバーク『ジュマンジ』 辺見まさなお訳, ほるぷ出版, [1984年] 2001年。

- 40) アントニオ・スカルメタ文・アルフォンソ・ルアーノ絵『ペドロの作文』 宇野和美訳, アリス館, 2004年。さらに, この県のグループによる教育資料では, イラストの学習, 社会の授業で「独裁」・「クーデター」・「レジスタンス」を学ぶこと, 読み広げるべき作品が示されている。その中に『茶色の朝』(フランク・パヴロフ文・ヴィンセント・ギャロ絵, 藤本一勇訳, 大月書店, [2003年] 2005年)がある。政府の独裁により, 日常的な身の回りのものすべてが茶色になるというこの作品は, 「独裁」の意味をより分かりやすい形で表現している。

- 41) 『ペドロの作文』 33頁。

- 42) 「準備級と初級1年のための段階的学習」 2頁。

- 43) 日本では, 小学校の教科書を出版している出版社, 光村図書出版・東京書籍・学校図書・三省堂のwebサイトを調べると, 各社とも教科書中で掲載または紹介している本のリストをwebサイトで閲覧できるか, またはファイルがダウンロードできるようにしている。各社ともに読み比べや読み広げには, 様々な工夫が見られる。例えば全社が, 同じ作家の作品を並べ(椋鳩十, アーノルド・ローベル, 斎藤隆介, 新美南吉, あまきみこ, 工藤直子, 安房直子他), 同じジャンルの本を揃えている(昔話・詩・言葉遊び・科学的読み物など)。面白い試みとしては, 東京書籍は, シリーズものを紹介している。4年下では, 「つながりのある物語を読もう」として, エルマーやあまきみこの「車のいろは空のいろ」や『ヒキガエルとんだ大冒険』を紹介している。他の出版社も, テーマや登場人物でつなげる試みなどを行っているが, 多くが読書の幅を広げようとするあまり, 種々のものが列挙されるに留まる嫌いがある。例えば, 東京書籍では, 「いろいろな国や地いきの物語を読もう」として世界各地の昔話を並べている。

東京書籍

<https://ten.tokyo-shoseki.co.jp/text/shou/kokugo/files/ekdz6265.xls> (2016年2月27日に最終アクセス)。

- 44) ピーター・シス『三つの金の鍵 魔法のプラハ』 柴田元幸訳, BL出版, 2005年。ピーター・シス『マドレンカ』 松田素子訳, BL出版, 2001年。

- 45) ユージーン・トリビザス文, ヘレン・オクセンバリー絵『3びきのかわいいオオカミ』 こだまともこ訳, 富山房, 1994年, 36頁。国民教育省のコメント入りの選書リストでは, 『三匹のコブタ』にもう1冊, ディヴィッド・ウィズナーによる『3びきのぶたたち』(ディヴィッド・ウィズナー作, 江國香織訳, BL出版, [2002年] 2003年)が追加されている。

この作品中では、子ブタたちがオオカミのいる話から抜け出す。つまり、グラフィックの空間の遊びで、絵が剥がれ、ページが折れ曲がって紙飛行機になり、子ブタたちを乗せていく。子ブタたちは別の話に入り込み、竜を救って、その竜と共に元の話に戻るといふものである。深化学習期では、劇中劇のように、物語を一つ上の次元から見るといふ込んだ構造を理解させるようになっている。

- 46) ガリマール社／ガリマール＝ジュネス（児童書）／教育のためのガリマール・サークル
<http://www.cercle-enseignement.com/Primaire/Cycle-II/Fiches-pedagogiques/La-veritable-histoire-des-trois-petits-cochons> (2016年3月22日に最終アクセス)。
- 47) 三匹の子ブタの話については、深化学習期の国民教育省による選書リスト(2004)では、アルノー・フロッシュの三匹の子ブタが挙げられ、その他三つのバージョンと比較することが提案されている。その中の1冊に和訳のある『三びきのコブタのほんとうの話』（ジョン・シェスカ文、レイン・スミス絵、いくしまさちこ訳、岩波書店、[1991年]、2012年）もある。
- 48) クヴァント・ブーフホルツ『見えない道のむこうへ』平野獅子訳、講談社、1999年、68頁。
- 49) クリス・ヴァン・オールズバーク『ハリス・バーディックの謎』村上春樹訳、河出書房新社、([1990年]、2015年)。
- 50) アンソニー・ブラウン作『かわっちゃうの?』さくまゆみこ訳、評論社、2005年。
- 51) オルレアン＝トゥール大学区, Écolire
http://www.ac-orleans-tours.fr/fileadmin/user_upload/ia28/doc_peda/MDL/actions/ecolire/2007-2008/pdf_peda/Le_loup_mon_oeil.pdf (2016年3月22日に最終アクセス)。スーザン・メドナー作・絵『コブラカタブラまほうのじゅもん』ひがしはるみ訳、フレーベル館、1996年、32頁。
- 52) アン・ファイン作、スティーブ・コックス絵『キラークヤットのホラーな一週間』灰鳥かり訳、(児童図書館・文学の部屋)評論社、1999年、78頁。
- 53) 選書については、日本においては、東京子ども図書館の活動を挙げたい。同館では選書の重要性を最優先とし、現在、児童図書館用の基本蔵書目録を作成中である。『絵本の庭へ（児童図書館基本蔵書目録1）』東京子ども図書館編纂、東京子ども図書館、2012年、397頁、以下続刊。
- 54) Connan-Pintado, Christiane, *Lire des contes détournés à l'école — À partir des Contes de Perrault*, Hatier Pédagogie, Hatier, 2009, pp. 125-126.
- 55) Une culture littéraire à l'école. Littérature à l'école. Ressources pour le cycle 3. Mars 2008.
http://media.eduscol.education.fr/file/ecole/46/9/culture-litteraire-ecole_121469.pdf
 (2016年3月31日に最終アクセス)。